

宮崎県立芸術劇場がプロデュースする宮崎を舞台にした演劇公演

「新 かぼちゃといもがら物語」#2 『神舞の庭 (かみまいのにわ)』

次々と名のある戯曲賞を受賞している大注目の劇作家

劇作家 長田育恵 インタビュー

2月28日から5日間 (5ステージ) 上演する

「新 かぼちゃといもがら物語」#2 『神舞の庭 (かみまいのにわ)』。

脚本を担当するのは、いま最も注目をあつめる劇作家・長田育恵 (おさだ・いくえ) さんです。脚本執筆のため、昨年12月に高千穂の夜神楽取材した長田さんに、取材の感想や脚本の構想などについてお話しいただきました。



高千穂の山間にたたく長田さん

夜神楽を体験してみよう

夏にも数日、宮崎を訪れて地元の方にインタビュー取材をさせていただきましたが、今回の5日間の滞在では、自分で宮崎に入っていったという感じがしています。夜神楽を体験してみると、書籍で読んでいたものと全然違っていました。今回は、高千穂町の二上神社の夜神楽を拝見しましたが、神社と氏子、集落が、それぞれの持つ役割を尊重しながら助け合って神楽を支えているというのがよくわかりました。神楽は芸術だと思いますが、そこで生きている人たちの暮らしの一部であり、絆そのものなんです。

5日間の収穫

前回宮崎に来たときに、「都市から距離が遠くなるほど、助け合っていないと生きていけない」という話を聞きました。その言葉の意味を、今回の滞在で実感することができました。宮崎という土地の懐の深いところが見え始めたような気がします。宮崎の人と接してみると、皆さん明るくて親しみやすく、助け合いの精神が根底にあるように感じました。さらに掘り下げていけば、奥深い山で暮らす生活の不便さだったり、祖先からずっと受け継いできているお墓や家のことだったり、もっと深い地層がその下にありそうな感じがしていて、今はなるべくその深い部分に、自分の目だったり皮膚感覚が届くといいなと思っています。深い地層があるというのが、身をもってわかり始めたというのが、この5日間の収穫だったと思います。



神楽舞に使われる神面が置かれた宮宮 (はこみや)



舞入れが終わったばかりの神楽宿にて

地層の部分も取り出しながら物語に

都会だと、たとえばマンション等に引っ越してしまったら前の住人がどんな人だったのかあまりわからないんですけど、神楽宿になる家では、何代も前の祖先からみんながここに生きているという時間の積み重ねがあります。周りがだんだん近代化していても、何も切り離せず降り積もっていく“地層”がここにはあるんだなと感じました。今回の作品では、現在の宮崎だけでなく、その地層になっている部分も取り出しながら物語にしていけたらいいなと思っています。

裏面につづく>>>>>